

P3-110 日本の周産期医療の崩壊を防ぐ糸口～シンガポールから日本を想う

Raffles Japanese Clinic
田島里奈

【目的】近年、日本では、諸種の事情により出産を取りやめる施設が相次ぎ、残された施設に産婦が殺到して、医師の過労による健康上の問題も懸念されている。そこで、海外から日本の現状をながめ、日本の周産期医療の崩壊を食い止めるヒントを探る。【方法】2006年7月から2007年8月までの間に当院で分娩した日本人52人について、分娩方法、分娩時間帯、転帰について検討した。計画出産については、子宮頸管が十分に熟化しているのを確認した後、あるいは妊娠41週を限度として待機して、分娩日を決定した。【成績】当院で分娩した52人の内、予定帝王切開は7例であった。経膈分娩予定の45名の内、計画出産は42名、その全員が時間内に分娩終了した。計画出産を希望しなかった3名のうち1名のみが時間内に分娩、2名は時間外の分娩となった。分娩経過中に緊急帝王切開となったのは7例であったが、計画出産を行ったことによると思われる、児や母体への合併症は認められなかった。緊急帝王切開はすべて時間内に行われたため、帝王切開決定から執刀開始までスムーズに行うことができた。【結論】日本では、計画出産はまだ少数派で、分娩が休日や夜間など時間外になることも頻繁にある。また、時間外にはマンパワーが不足し、急変時の対応が、時間内に比べて難しいという施設も多いのが現状である。しかし、分娩をコントロールすることに対し抵抗を感じる患者も少なくなく、分娩が夜間、特に深夜に及ぶことによる危険性について、国民に理解を求める必要がある。産科医不足が叫ばれている中、短期間での医師増員が期待できないのであれば、分娩体制の変更についても検討する余地があるのではないと思われる。

P3-111 婦人科悪性腫瘍に対する腹腔鏡下リンパ節郭清術：Staging laparoscopyは有効か！

富山県立中央病院
舟本 寛, 飴谷由佳, 舌野 靖, 炭谷崇義, 吉越信一, 中島正雄, 谷村 悟, 中野 隆

【目的】当科では倫理委員会の承認を得て1998年に腹腔鏡下リンパ節郭清術を開始した。今回、婦人科悪性腫瘍に対して治療方針決定のため、腹腔鏡下に後腹膜リンパ節を郭清し、転移の有無を診断する staging laparoscopy (SL) の有用性について報告する。【方法】対象は1998年から2007年6月までにインフォームドコンセントを得てSTが施行された49例である。その内訳は子宮頸癌35例、卵巣癌8例、子宮体癌5例、陰癌1例であった。子宮頸癌、陰癌に対しては主に下腸間膜動脈(IMA)以下の傍大動脈リンパ節(PAN)を、卵巣癌、子宮体癌には主に主治療終了後の re-staging のため、左腎静脈(I-Rv)以下のPANから骨盤リンパ節(PLN)までを摘出した。IMA以下のPAN摘出例をA群(n=35)、I-Rv以下のPAN摘出例をB群(n=8)、PAN+PLN摘出例をC群(n=6)とし、手術時間、出血量、摘出リンパ節数、術前CTとPAN転移の一致率などについて検討した。【成績】平均手術時間、出血量はA, B, C群でそれぞれ103分、189分、326分、122ml、38ml、143mlであった。平均摘出PAN数はA群10.1個、B群22.3個、平均摘出PLN数は14.2個であった。術前CTでPAN転移なし41例中、SLで6例にPAN転移を認め、CTで転移疑い8例中、4例は転移を認めなかった。合併症は右卵巣動脈からの出血で輸血を行ったのが1例、後腹膜膿瘍が1例であった。また、子宮頸癌35例中8例においてSLの結果により主治療、照射野の変更を行った。【結論】SLは長時間を要するが、十分に安全に行える手術手技である。特に子宮頸癌においては主治療や放射線照射野を決定し、治療を個別化するのに有用である。

P3-112 骨盤内リンパ節郭清術後の後腹膜ドレーン細菌感染に関する検討

日本大
中澤禎子, 千島史尚, 曾根君恵, 青木洋一, 浅沼亜紀, 田村正明, 相田賢司, 村瀬隆之, 高田眞一, 山本樹生

【目的】術後ドレナージには、観察のため(information)、予防のため(prophylactic)、治療のため(therapeutic)の3つの目的があるといわれている。近年、術後リンパ嚢腫形成の軽減目的で骨盤内リンパ節郭清術の際、後腹膜を閉鎖しない方法が広まりつつあり当院でも2003年以降は後腹膜を開放としている。後腹膜を閉鎖しない場合、スペースが開放されるため浸出液誘導のための予防的ドレナージの必要性は低下する。後腹膜ドレーン細菌感染の有無に関して検討し術後ドレナージの意義について考察した。【方法】本院において2005年1月より2007年6月までの期間に婦人科悪性腫瘍手術の際骨盤リンパ節郭清術を施行した59例を対象とし、ドレーン抜去時のカテーテル細菌感染、及び術後感染の有無について検討した。更に抗生物質の期間、ドレーンの挿入期間の違いによりそれぞれの群に分類し術後3日目の白血球数、CRP値、体温について比較検討した。【成績】ドレーンから細菌が検出された症例は59例中5例(8.5%)であった。これらの症例はいずれも明らかな術後感染を実際起こしていなかった。検討した59例においてリンパ節郭清部位が原因する術後感染は認められなかった。ドレーンを2日以内に抜去した群はそれ以降抜去した群と比較し術後3日目のCRP値の上昇を認めたが白血球数、体温に有意差は認めなかった。【結論】骨盤リンパ節郭清術後に後腹膜細菌感染を起こす率は極めて低いといえる。術後ドレナージの意義として最も重要なものは再出血などに対する information drain であるといえる。よって後腹膜を開放とすれば、術後再出血がない場合においては比較的早期のドレーン抜去が望ましいと考えられた。